日本旅行文化協会が発行した戦前を代表する、総合旅行雑誌。

日本旅行文化協会 旅 全61巻+別巻1

［監修・解説］荒山正彦　●揃定価：本体1,395,000円＋税　ISBN978-4-8433-5808-5 C3326　A5判上製／カバー

第1回配本・全4巻　2020年10月刊行予定
揃定価：本体90,000円＋税（各巻定価：本体22,500円＋税）
ISBN978-4-8433-5809-2 C3326
1 ◆1924（大正13）年4月～8月　ISBN978-4-8433-5823-8
2 ◆1924（大正13）年9月～12月　ISBN978-4-8433-5824-5
3 ◆1925（大正14）年1月～4月　ISBN978-4-8433-5825-2
4 ◆1925（大正14）年5月～8月　ISBN978-4-8433-5826-9

第2回配本・全4巻　2021年6月刊行予定
揃定価：本体90,000円＋税（各巻定価：本体22,500円＋税）
ISBN978-4-8433-5810-8 C3326
5 ◆1925（大正14）年9月～12月　ISBN978-4-8433-5827-6
6 ◆1926（大正15）年1月～4月　ISBN978-4-8433-5828-3
7 ◆1926（大正15）年5月～8月　ISBN978-4-8433-5829-0
8 ◆1926（大正15）年9月～12月　ISBN978-4-8433-5830-6

第3回配本・全6巻　2021年12月刊行予定
揃定価：本体135,000円＋税（各巻定価：本体22,500円＋税）
ISBN978-4-8433-5811-5 C3326
9 ◆1927（昭和2）年1月～4月　ISBN978-4-8433-5831-3
10◆1927（昭和2）年5月～8月　ISBN978-4-8433-5832-0
11◆1927（昭和2）年9月～12月　ISBN978-4-8433-5833-7
12◆1928（昭和3）年1月～4月　ISBN978-4-8433-5834-4
13◆1928（昭和3）年5月～8月　ISBN978-4-8433-5835-1
14◆1928（昭和3）年9月～12月・附録　ISBN978-4-8433-5836-8

第4回配本・全4巻　2022年6月刊行予定
揃定価：本体90,000円＋税（各巻定価：本体22,500円＋税）
ISBN978-4-8433-5812-2 C3326
15◆1929（昭和4）年1月～3月　ISBN978-4-8433-5837-5
16◆1929（昭和4）年4月～6月　ISBN978-4-8433-5838-2
17◆1929（昭和4）年7月～9月　ISBN978-4-8433-5839-9
18◆1929（昭和4）年10月～12月　ISBN978-4-8433-5840-5

第5回配本・全4巻　2022年12月刊行予定
揃定価：本体90,000円＋税（各巻定価：本体22,500円＋税）
ISBN978-4-8433-5813-9 C3326
19◆1930（昭和5）年1月～3月　ISBN978-4-8433-5841-2
20◆1930（昭和5）年4月～6月　ISBN978-4-8433-5842-9
21◆1930（昭和5）年7月～9月　ISBN978-4-8433-5843-6
22◆1930（昭和5）年10月～12月・附録　ISBN978-4-8433-5844-3

第6回配本・全4巻　2023年6月刊行予定
揃定価：本体90,000円＋税（各巻定価：本体22,500円＋税）
ISBN978-4-8433-5814-6 C3326
23◆1931（昭和6）年1月～3月　ISBN978-4-8433-5845-0
24◆1931（昭和6）年4月～6月　ISBN978-4-8433-5846-7
25◆1931（昭和6）年7月～9月　ISBN978-4-8433-5847-4
26◆1931（昭和6）年10月～12月　ISBN978-4-8433-5848-1

第7回配本・全4巻　2023年12月刊行予定
揃定価：本体90,000円＋税（各巻定価：本体22,500円＋税）
ISBN978-4-8433-5815-3 C3326
27◆1932（昭和7）年1月～3月　ISBN978-4-8433-5849-8
28◆1932（昭和7）年4月～6月　ISBN978-4-8433-5850-4
29◆1932（昭和7）年7月～9月　ISBN978-4-8433-5851-1
30◆1932（昭和7）年10月～12月　ISBN978-4-8433-5852-8

第8回配本・全4巻　2024年6月刊行予定
揃定価：本体90,000円＋税（各巻定価：本体22,500円＋税）
ISBN978-4-8433-5816-0 C3326
31◆1933（昭和8）年1月～3月　ISBN978-4-8433-5853-5
32◆1933（昭和8）年4月～6月　ISBN978-4-8433-5854-2
33◆1933（昭和8）年7月～9月　ISBN978-4-8433-5855-9
34◆1933（昭和8）年10月～12月　ISBN978-4-8433-5856-6

第9回配本・全4巻　2024年12月刊行予定
揃定価：本体90,000円＋税（各巻定価：本体22,500円＋税）
ISBN978-4-8433-5817-7 C3326
35◆1934（昭和9）年1月～3月　ISBN978-4-8433-5857-3
36◆1934（昭和9）年4月～6月　ISBN978-4-8433-5858-0
37◆1934（昭和9）年7月～9月　ISBN978-4-8433-5859-7
38◆1934（昭和9）年10月～12月　ISBN978-4-8433-5860-3

第10回配本・全4巻　2025年6月刊行予定
揃定価：本体90,000円＋税（各巻定価：本体22,500円＋税）
ISBN978-4-8433-5818-4 C3326
39◆1935（昭和10）年1月～3月　ISBN978-4-8433-5861-0
40◆1935（昭和10）年4月～6月　ISBN978-4-8433-5862-7
41◆1935（昭和10）年7月～9月　ISBN978-4-8433-5863-4
42◆1935（昭和10）年10月～12月　ISBN978-4-8433-5864-1

第11回配本・全4巻　2025年12月刊行予定
揃定価：本体90,000円＋税（各巻定価：本体22,500円＋税）
ISBN978-4-8433-5819-1 C3326
43◆1936（昭和11）年1月～3月　ISBN978-4-8433-5865-8
44◆1936（昭和11）年4月～6月　ISBN978-4-8433-5866-5
45◆1936（昭和11）年7月～9月　ISBN978-4-8433-5867-2
46◆1936（昭和11）年10月～12月　ISBN978-4-8433-5868-9

第12回配本・全6巻　2026年6月刊行予定
揃定価：本体135,000円＋税（各巻定価：本体22,500円＋税）
ISBN978-4-8433-5820-7 C3326
47◆1937（昭和12）年1月～4月　ISBN978-4-8433-5869-6
48◆1937（昭和12）年5月～8月　ISBN978-4-8433-5870-2
49◆1937（昭和12）年9月～12月　ISBN978-4-8433-5871-9
50◆1938（昭和13）年1月～4月　ISBN978-4-8433-5872-6
51◆1938（昭和13）年5月～8月　ISBN978-4-8433-5873-3
52◆1938（昭和13）年9月～12月　ISBN978-4-8433-5874-0

第13回配本・全4巻　2026年12月刊行予定
揃定価：本体90,000円＋税（各巻定価：本体22,500円＋税）
ISBN978-4-8433-5821-4 C3326
53◆1939（昭和14）年1月～6月　ISBN978-4-8433-5875-7
54◆1939（昭和14）年7月～12月　ISBN978-4-8433-5876-4
55◆1940（昭和15）年1月～6月　ISBN978-4-8433-5877-1
56◆1940（昭和15）年7月～12月　ISBN978-4-8433-5878-8

第14回配本・全5巻＋別巻1　2027年7月刊行予定
揃定価：本体135,000円＋税（各巻定価：本体22,500円＋税）
ISBN978-4-8433-5822-1 C3326
57 ◆1941（昭和16）年1月～6月　ISBN978-4-8433-5879-5
58 ◆1941（昭和16）年7月～12月　ISBN978-4-8433-5880-1
59 ◆1942（昭和17）年1月～6月　ISBN978-4-8433-5881-8
60 ◆1942（昭和17）年7月～12月　ISBN978-4-8433-5882-5
61 ◆1943（昭和18）年1月～8月　ISBN978-4-8433-5883-2
別巻◆ 解説・総目次・資料　ISBN978-4-8433-5884-9

ゆまに書房　〒101-0047 東京都千代田区内神田2-7-6　TEL.03（5296）0491　FAX.03（5296）0493　http://www.yumani.co.jp/

ご注文書
ゆまに書房　Tel.03（5296）0491／Fax.03（5296）0493　年　月　日
日本旅行文化協会 旅　全61巻＋別巻1
揃定価：本体1,395,000円＋税　ISBN978-4-8433-5808-5 C3326　セット
お名前
ご住所
TEL　（　　）

取扱店
※毎度ありがとうございます。お申し込みはぜひ当店へ。

20.10/03.7,000.RS

本文見本（適宜縮小してあります）

●（上）1925年4月・第2巻第4号「松江附近の春」佐近益栄
●（左）1924年4月・第1巻第1号「旅の詩と歌と」田山花袋

本書の特色

●最もポピュラーな旅行雑誌

1872（明治5）年の鉄道開通から50年が経ち、観光旅行が一般にも広まり、全国的に旅行団体が設立されるといったなかで、日本旅行文化協会（1924年設立）が設立。『旅』はその機関誌として1924（大正13）年4月に刊行が開始された。

●作家などによる紀行文や随筆などを掲載

創刊号には田山花袋が寄稿しているように、作家・評論家による、紀行文・随筆が多く掲載された。充実した観光地案内、歴史、情報、ルート紹介。また、鉄道省の官僚や協会役員による論説なども掲載された。1934（昭和9）年にはその活動内容の重複を理由にジャパン・ツーリスト・ビューローと合併する。1935（昭和10）年には年間24万部ほど発行されたという。太平洋戦争中は「旅行指導雑誌」という副題が付けられ、1943年（昭和18年）には一時休刊するが、1946年（昭和21年）に復刊。

●大正～昭和戦前期における旅行形態を知るための貴重資料

本企画では、休刊される1943年（昭和18）年までを復刻する。日本の近代ツーリズムが形成される過程、大正～昭和戦前期における旅行形態を知ることのできる貴重資料である。本企画によって、近代日本の観光イメージが明確にされ、日本近代史やツーリズムの研究の一助となることを確信いたしております。

●錚々たる執筆陣

巌谷小波　住井すゑ　森田草平　海音寺潮五郎　松岡洋右　深尾須磨子　山口誓子　井伏鱒二　村松梢風　平山廬江　馬場弧蝶
佐々木茂索　河東碧梧桐　深田久彌　木村荘八　丹羽文雄　田河水泡　岡本綺堂　高浜虚子　三木露風　林房雄　江馬修　飯田蛇笏　新居格　平田禿木　水島爾保布　杉村楚人冠　壽岳文章　武者小路実篤　三田村鳶魚　宇野浩二　内田百閒　岡本かの子　正岡容　三宅やす子　近松秋江　生田春月　上司小剣　大宅壮一　武場隆三郎　藤森成吉　水野葉舟　石坂洋次郎　吉田絃二郎　与謝野晶子　木村伊兵衛　伊藤整　黒田初子　生方敏郎　中村星湖　恩地孝四郎　大町圭月　岡本一平　野尻抱影（順不同）ほか

刊行のことば

荒山正彦

ジャパン・ツーリスト・ビューローの機関雑誌『ツーリスト』（大正二年創刊）の復刻に続き、旅行雑誌『旅』の復刻がはじまった。『旅』は、東京アルカウ会の同人誌を継承する形で、大正一三（一九二四）年四月に創刊され、戦前期においては昭和一八（一九四三）年八月までのおよそ一九年間にわたって月刊雑誌として発行された。昭和一八（一九四三）年一〇月には『旅』の後継雑誌として『交通東亜』が創刊されたが、やがて戦時下において終刊を迎え、戦後の昭和二一（一九四六）年一一月に『旅』は復刊された。

『ツーリスト』は、外客誘致を掲げて創設されたジャパン・ツーリスト・ビューローの機関雑誌であり、和文欄に加えて英文欄を持ったのに対して、『旅』は旅行団体の同人誌からスタートし、発行の団体名称と組織は複雑に移り変わるものの、戦前期においては一貫して旅行のクラブ組織から発行され続けた。雑誌『ツーリスト』と雑誌『旅』は、戦前期を代表する二大旅行雑誌であり、戦前期における両雑誌が復刻出版される意義は大きい。

ところで、日本における旅行団体の歴史は近代以前にさかのぼる。たとえば近世における伊勢参宮参詣の伊勢講や、富士詣（富士登山）の富士講などの旅行団体はすでに組織されていた。こうした旅行団体としての講組織は明治期以降にも継承されたが、一方で、明治期以降には、信仰を軸とした旅行団体とは異なる旅行や登山の団体が各地で組織された。

現在の大阪市では、明治三九（一九〇六）年六月に「大阪探勝わらじ会」が創設され、関西近郊をはじめ日本各地へ団体で旅行を行い、わらじ会旅行集「道づれ」が発行された。また大正三（一九一四）年二月には、現在の神戸市御影に「日本アルカウ会」が創設された。日本アルカウ会は、六甲山をはじめ近畿地方での山登りを目的とした旅行会を組織した。明治期から大正期、そして昭和戦前期にかけて、こうした旅行団体や登山団体が全国各地で数多く誕生した。

大正一〇（一九二一）年四月、現在の東京都荒川区日暮里において「東京アルカウ会」が誕生する。東京アルカウ会では日本アルカウ会と同様に、定期的な旅行会を催し、会員による団体旅行を組織していた。東京アルカウ会では、設立の翌大正一一（一九二二）年に、講演会や展覧会、出版などを行うためあらたに「日本旅行文化会」を立ち上げた。この日本旅行文化会では、大町桂月、木暮理太郎、谷口梨花、田山花袋などを顧問とし、月刊の会報誌『旅』が発行された。しかしながら会報『旅』は、大正一二年六月の第三巻第六号をもって終刊となり、日本旅行文化会は、鉄道省、南満洲鉄道、日本郵船、大阪商船、ジャパン・ツーリスト・ビューローなどの大きな機関が加盟する日本旅行文化協会へと改組された。

新たに組織された日本旅行文化協会は、関東大震災の翌年、大正一三（一九二四）年に発足し、ここで新たに月刊雑誌『旅』が創刊された。『旅』創刊号の編集後記には、「考へれば日本旅行文化協会が、日らしい日の光を見るまでには随分骨を折らされて来た。今日が来るまでに足かけ四年」と、日本旅行文化会創設から日本旅行文化協会への改組までの労苦が綴られている。

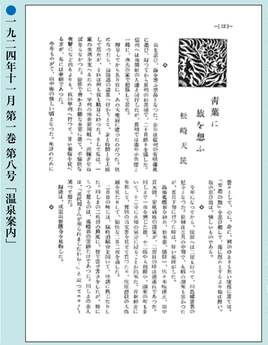
月刊の旅行雑誌『旅』の編集部は、鉄道省運輸局内に置かれ、大正一五（一九二六）年には日本旅行文化協会へと名称を変えるが、『旅』はコンスタントに発行され続けた。他方で、日本旅行協会の主要会員でもあったジャパン・ツーリスト・ビューロー内において、昭和七（一九三二）年に旅行団体「ツーリスト倶楽部」が設けられ月刊雑誌『旅行日本』が創刊された。ジャパン・ツーリスト・ビューローは、鉄道省、南満洲鉄道、日本郵船、大阪商船などによって組織された機関であったため、結果的にこれらの組織が二つの旅行雑誌を持つこととなった。

そこで昭和九（一九三四）年に『旅』を発行する日本旅行協会と『旅行日本』を発行するツーリスト倶楽部は合併し、日本旅行倶楽部として再スタートを切り、雑誌『旅』の発行は日本旅行倶楽部によって継続された。この時、雑誌の判型はそれまでの菊判から四六倍判へと大型化された。また日本旅行協会の名称は、ジャパン・ツーリスト・ビューローによって発行される旅行案内書や汽車時間表（時刻表）の出版時に継続して用いられることとなった。

雑誌『ツーリスト』の復刻に続き、『旅』の復刻においても公益財団法人日本交通公社「旅の図書館」からデジタルデータの提供を受けた。日本旅行文化会の会報『旅』の発行からおよそ一〇〇年を迎える節目に、戦前期の雑誌『旅』が印刷出版物として再び刊行されることにも大きな意義があると考える。なお、この度の復刻では別巻に、日本旅行文化会『旅』の一部と、戦前期における『旅』の後継雑誌『交通東亜』創刊号を収録する。

■『日本旅行文化協会 旅』主な収録内容

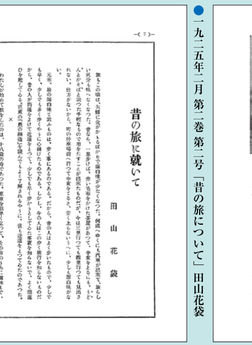
●一九一四年四月第一巻第一号（創刊号）表紙



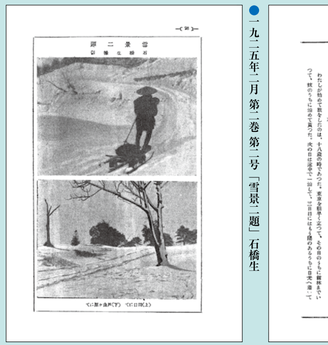
●一九一四年七月第一巻第四号「青葉に旅を想う」松崎天民

●一九一四年十一月第一巻第八号「温泉案内」

●一九一四年十二月第一巻第九号「満蒙における満鉄の施設」松岡洋右



●一九一五年二月第二巻第二号「昔の旅について」田山花袋



●一九一五年三月第二巻第三号「雪景二題」石橋生

目次から

●1924（大正13）年4月　第1巻 第1号（創刊号）

「日本旅行文化協会創立に際して」野村龍太郎／「旅の詩と歌と」田山花袋／「桃郷雑信」南方恒夫／「汽車の窓に寄りて（短歌）」嶋野梨郷／「京の春」小倉徳弥／「信州雑録」小倉正勝／「キャメラの徳島旅行」／「北の旅（１）第一信、函館まで、第二信、大沼の半日」喜多村進／「旅と宿屋（対話）」松崎天民／「忘れられぬ土地 天塩の街」副田丘人／「伝説集（１）牛ヶ淵、姨捨山」武田豊四郎／「講演旅行の喜劇」生方敏郎／「鮮、満、支を旅遊して」飯島利安／「満州旅行に就いて」坂本政五郎／「桜狩は何処へ」矢野俊孝／「東京の駅二等待合室にて」関口鎮雄

●1924（大正13）年12月　第1巻 第9号

「鮮満を自己の生活にとり入れて」浅野梨郷／「満蒙の開発」野村龍太郎／「車窓から鮮満見物」永嶺信恒／「苦力買収の光景」橋本榮椰子／「防寒服」平野博三／「鮮満案内雑感高砂政太郎／「満蒙における満鉄の施設」松岡洋右／「支那の小話」／「慶州見物」田山花袋／「世界の大宝庫 満蒙の産業状況」坂本政五郎／「雨中の牡丹台」徳富蘇峰／「満州冬の思い出」佐藤忠恕／「支那の兵隊」ＸＹＺ生／「外金剛と内金剛」河東碧梧桐／「朝鮮人参の話」三宅驥一／「鮮満游草」久保天随／「スキー夜話」茂木生／「金剛山探勝日記」楠清／「奉天」／「音楽を喰う習慣」／「台湾周遊団募集常夏の国南溟の美島」／「会寧いろいろ」中西悟堂／「本会主催天龍川下り」乱黄足

●1925（大正14）年4月　第2巻4号

「女性と旅行」三宅やすず／「松江附近の春」佐近益栄／「桜の名所・桜の巨樹・桜の名木」三好学氏談／「大津の桜」森三樹雄／「九州たより（其の二）」浅田栄一郎／「旅客から、旅館から（宿屋研究の二）旅客から」沖野岩三郎・千葉亀雄・高村光太郎・森本厚吉・大泉黑石・田中館愛橘・厳谷小波・尾上紫舟／「夕暮富士（詩）」生田春月／「ホテル小話（承前）」しゅいち・うちだ／「伝説と地方色　謡曲櫻川の由来」山路秀穂／「伝説と地方色　海の伝説」青戸漁郎／「女化ケ原の白狐」楠田實雄／「伝説と地方色　伝説を生んだ石」目黒勇吾／「伝説と地方色　相模の大鳳」斎藤昌三／「北海道へ（漫文漫画）」麻生豊／「さくらの話」井上螺花／「桜花花は何処へ（大阪を中心として）」永嶺信恒／ほか

●1925（大正14）年9月　第2巻9号

「風景の見方」加納一郎／「四国霊場めぐり」斎藤知白／「白糸の瀧（静岡遊行記の内）」田中貢太郎／「お国詰りその他」／「大町桂月氏の墳墓の地鳥温泉とその附近の風光」／「大町桂月氏を憶う」（「桂月先生の逸話」田中貢太郎・「桂月先生の逸話桂月氏についての思い出三三」谷口梨花・「鳴呼大町桂月翁」遅塚麗水・「旅人としての桂月翁」松崎天民・「残された謎」鳥浪男・「晩年の桂月翁」生方敏郎・「桂月翁と鳥温泉」三好善一）／「旅で出会った話」浅野梨郷／「滑稽東海道中膝栗毛」大正一九／「旅とラジオ（承前）」羅路夫／「駅名クロスワード課題」／「旅先で感じたこと」（「無謀な宣伝に乗るな」永嶺信恒・「山岳地方の迷信伝説をむやみに破壊するなかれ」三木高嶺）／「通俗鉄道講話」荻尾悟郎述／「稲葉山と長良川」荻原井泉水／ほか

●1940（昭和15）年12月　第17巻12号

「我が徒歩旅行の記録」（「生れて初めて見た海」中村武羅・「雨の中でデカンショ音頭」吉岡彌生・「濤に打たれる気遠娘」小寺菊子・「木曾街道健脚行」西川義方／「新体制版　奥州街」／「道徒歩旅行記」古林善治／「防諜読本」（その二）大坪義勢／「観光地の新体制」（「旅館は社会の公器である」京都市観光課／従業員の月給制と厚生運動」札幌観光協会／「勇士や遺族に旅館と名湯開放」熱海温泉旅館組合／「宿泊施設の新体制化を準備中」神戸市観光課／「旅館の新体制と従業員の向上」水上温泉組合／「畳一枚一日十銭より五十銭迄」別府市観光課／「官民団体の為の温泉療養」白浜湯崎観光協会／ほか

●1942（昭和17）年10月　第19巻10号

「鉄道開通七十年特集」（「鉄道七十年を迎う」阿部牧太郎・「驚くべき鉄道七十年の飛躍」岩崎磯五郎・「大陸縦貫鉄道」・「東京下関間新線計画」・「関門海底隧道の出来るまで」・「鉄道物の初め年表」・「開通当時の鉄道略則」・「明治初年の汽車賃と物価」・「第一号機関車と義経号」・「鉄道殉難碑物語」坂田俊夫・「中央アジア横断鉄道」・「旅と客車の腰掛」吉田吉次・「初めて汽車に乗った頃　あっけない十数分」五十嵐力・「初めて汽車に乗った頃　山に響く汽笛」香取秀眞・「初めて汽車に乗った頃一等車の卓子」斎藤隆三・「初めて汽車に乗った頃　岡蒸気時代」杉村楚人冠・「鉄道映画の今昔を語る座談会」・「広軌と狭軌の問題」・「列車の速力早わかり」）／「踏査記事」（「播州算盤のふるさとへ」古林善治・「雨の日の赤倉「天心山荘」」寺田幸子・「マタギ部落百宅秘境探訪」太田雄治・「栗駒山をめぐる湯」亀谷久任）／ほか

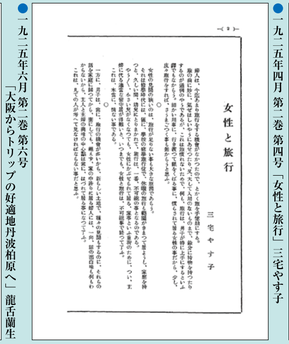
●1943（昭和18）年4月　第20巻4号

「旅行指導」（「支那旅行の特徴」米内山庸夫・「旅と防諜」宮部幸三・「旅行と空襲」葛西健蔵・「京阪神三都通学難解決策」吉田邦好・「交通地獄統和策なきや」・「急行旅客列車其の他旅客列車の整理や廃止は何故断行されたか」・「婦人の立場から　遊楽旅行批判」市川房枝・ガントレット恒・田中孝子・宮本百合子・「通勤通学混雑統和　私の名案」村松久義・下村海南・齋藤忠・伊崎省三・宮崎新一・「混んでる列車透いてる列車」石井東助・「運行図表ともノの動き」金谷猛）／「徒歩旅行　四月の徒歩旅行案」（「東京中心・産業戦士向」茂木愼雄・「大阪中心・家族連れ向」有馬茂純）／「徒歩旅行　推奨したい徒歩行路（東京中心／大阪中心）」山本佐一郎・安藤博・小倉菊枝・半田英三・伊藤留次郎・宇田川勇太郎・伊崎等・中山沖右衛門・岩崎丙午郎・高野正雄／ほか

●1943（昭和18）年8月　第20巻8号（終刊号）

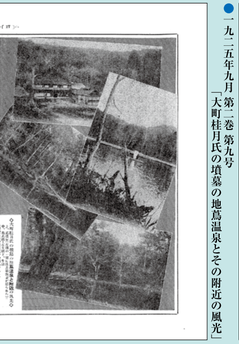
「指導記事」（「学徒の野外錬成」・「「旅行切符制」考」・「警報発令下の交通機関」・「交通道徳用柳」・「大自然と青少年の錬成」）／「五私鉄国鉄に合併」／「今日の海上輸送戦」／「交通界豆報道」／「終刊号に寄す」（「手塩にかけた当時の「旅」」・「三度の誕生日を待つ」・「「旅」と私」・「私の関係していた当時の「旅」」・「「旅」の果した役割」・「「旅」の生長を回顧して」・「「旅」の足跡」・「あの頃のグラフ」・「執筆者として」櫻井忠温・岩崎榮・大森洪太・松波仁一郎・田河水泡・相馬御風・田村剛・室積徂春・下村宏・荻原井泉水・坪谷水哉・川上三太郎・新居格・藤本九三・富安風生）／ほか

●一九一五年三月第二巻第三号「南満の長春」中野政次



●一九一五年四月第二巻第四号「女性と旅行」三宅やす子

●一九一五年六月第二巻第六号「大阪からトリップの好適地丹波柏原へ」龍舌蘭生



●一九一五年九月第二巻第九号「大町桂月氏を憶う・桂月先生の逸話」田中貢太郎

●一九一五年八月第二巻第八号「桂月先生の逸話」田中貢太郎

●一九四三年八月第二十巻第八号（終刊号）表紙